通信全覧二編

類輯十一

百三

齋
二

和書門
類
三三〇〇五號
二〇六函
三架
三〇三冊

内閣文庫
和書
類
三三〇〇五號
三〇三冊
一八〇函
一九架
(和220)

内閣文庫		
番號	和	33005
冊數	303(220)	
函號	184	271

共百六十九

第十

類輯巻之十一　長崎居留地
借判之二

甲子二月廿八日於長崎奉行所服部長門守松平石見守
英國ミニストルアールコツク江對話之内

一　長崎横濱地所之儀ニ付昨年六月
長崎江参リ候節取極候居留地
一　其後取調候処未御治定ニ不相成候処
も有之候得共右地所之義ニ付而ハ場所
ニ而者右長崎表大浦辺之地所一渡ニ洽定
致旨申来り候処右地所ニ付
積りニ候

一 山ノ役所ニ而申上候儀者兼而申上候通
船々ニ而右役所へ罷出候儀ニ而本船之
者共役所へ相詰候者共其外之者共山ノ
中船頭役所ニ而抜荷之儀ハ其外之者共
申付役所ニ而相改船々荷物之儀者
積荷申渡候品々荷物之儀ハ右役所へ相
改候儀者是迄之通申付候
一 船頭共へ申渡候儀者其外之者共へ申付
右之品々相改候儀ハ是迄之通

儀者此度申渡候通其外之者共へ
山ノ中船頭役所ニ而相改候
儀ニ候

一 中船頭之儀者役所ニ而申付候品々
其外之者共へ相渡候儀ニ候
一 船頭共へ相改候儀者是迄之通
相改候儀ニ而其外之者共へ申付
可申候
一 右之儀者此度申渡候通可相守候

第三

申四月廿九日 [illegible] 中務大輔殿
對馬守殿英國公使アールコックゟ之附紙之内

一 長崎表居留地之事ニ付十ヶ月
前ゟ上ケ候彼地居住之者共願ケ候
場所ニ相成候様仕度候右之書翰ゟ
十ヶ月ニ相成候右ゟ願候場所ゟ決
定ニ相成候様仕度候
只埋立地住居と斗ニ而生事柄

治定と申ニ付而ハ地代之外
追々十ヶ年ニ至候ハヽ廃シ取極候上ニ
此節迄居住之者今以不都合
ニ場所ニ差支障候
一 長崎表ニ而右等之事当正月ニ而應接ニ而
有之右者彼地在留と家士ニ而候
御互可被振申候処当時者多分右様
相成候事ニ而可有之と存候
当地ニ而者地代之義先達而申上候

御互ニ当時国々住居之地代ニ而見
合セ候ニ付而ハ取極と有之候得共
彼地相当之私家人ニ而貸渡候
事ニ付出島地代と比較之上ニ而可申
不都合ニ有之候得共出島地代ニ而
当時各国ニ而も当テ高価之地代ニ
御座候

返書申出 多吉郎 渡

一 先達而申上候御不築出来ニ而代々と

一　等出之高反別候得ハ所ニ而返納
可至年ニ経費之多少ニ有之候
得共築立ニ而出入費ニ拘り候ニ付
申達中候

一　築立ニ而場所ニ寄手入ニ掛り候費ハ地位ニ
宜く入用ニ拘り候義ニ寄而地位ニ寄り
地代ニ高下之有之事ニ候

一　地位ニ而事ニ寄候得共築立ニ而地ニ寄
山ニ而葉ニ寄地味之善悪ニ寄候

一　其義を遂一属ニ而場所柄推想ニ而其
定ニ而ハ如何ニ支配方と考立ニ而詮相と
申事ニ候

一　素人細事ニ陥り候義席ニ而
申上候義取扱ニ而大要を取捨候ニ
為一体ニ而地代を町並ニ候哉築立
ニ而入費ニ候哉

一　築立ニ而入費ニ之当ニ而其地町並ニ而地
代ニ有之候得共見所ニ寄場所柄ニ寄り

地代ニ高下有之事ニ而右等之儀ハ一也場
所之善悪ニ寄候而施決ニ而何国ニ而も裏表
ニ寄候而違ひ有之と同し事ニ候

一 右様相集候得ハ宜敷土地ニ
而其儘甚ニ相揃繁昌之地代ハ
事相成候一ト政府ニ而御申立候様
ニ寄候得ハ役日々費ニ相成候ハヽ有之候
御坐候者譲地ニ而御取計相仕候

一 速ニ譲地ニ可申哉ニ候

一 右様相集候而地代ニ而要候事中
其上ニ地代割合之儀者取極地所
割渡方其節ニ他人ニ譲り候ハヽ
其支配候而同様取計ニ而相渡地
其後ハ右職人相成之者私之所々支道
無之ニ付て候得者右之譲地所士ニ通道
仕候義ニ付候

一 其上ニ而其支配ニ而買候而可有之候得者其候と
家士と談判ニ而右之両所無之事ニ相並

在留之節ハ政府ニ而申立置候得ハ
其場所ニ而心得相済可申候

一 素ゟ双方廉直ニ取計候様可
申者ニ付 左方損失有之候ハゝ通用之趣
取計候

一 只今ニ而ハ萬一法定ニ相成候上ハ築
立地之納屋等取建候とも法之主意
ニ而ハ相拘候而ハ差支候ニ付是迄之通 蔵
商家ニ而ハ取締相立候様致度

一 因而ハ住居之為ニハ建物相傾候
得共湿地ニ而ハ病生し為人ニ不宜
候間丘之方山之斜地通ニ而住
居可申事ニ候

一 山之裾通ニ而未満ニ而草木生茂り候育て
可申候

一 此義ハ細事ニ申上候事ニ者候得共
商人共湿地住居不申候様相成候
様伺候処是ニ而決定可申候

三十一番

申四月六日達ス

英吉利国在日特派公使兼総領事
エキセルレンシー
ルーセルホルトアルコツクト
以書翰申入候長崎表居留地之義付商館
之儀大小之条件不少と存候ニ付中ニ
新ニ居留之場所を埋立地并山崩ニ通リ
候ニ而平地勢ニ候得共至而手支之事有之候得取斗

三十一番

借地代之義右地の振合を以而場所ニ寄り地
位ニ応し右当方ニ而相極可申候委曲之儀
無之此程両国議ニ而彼地年割ニ而其外ニ
申述候ニ付当方ニ而談判可致哉十日迄ニ
報有之候過日第拾壱号書簡之趣致承知
答ニ及候此段申進候拝具謹言

万延元年申四月日

脇坂中務大輔

安藤対馬守

申四月十一日相越

第五十七号

外国事務宰相台下ニ呈ス

千八百六十年第五月第二十六日江戸ニ於而

利太尼亜何良殿下

余第五月二十二日ニ長崎ニ於る外国人

住居の事ニ就きて贈れる台下の書簡

を落手せり而して余此事ニ付る台下

と陳述せる書簡ニ答ふ近頃台下ニ為し

會議の趣を速ニ長崎奉行ニ報すべし
余信ト思ふらく台下も亦速ニ長崎
奉行ニ委細ニ諸件を取捌く成程
と且取扱ふ趣き容易ニ執ての命令と
共ニて法を営ミ台下委ニ册を費し余も
亦勉めて商議すといへとも遂ニ定る事の結
局と為すべし敬白

日本在留ハレブリタニヤマーイエステイト總外公使
全權ミニストル
ハーセルホールトアールコック手記

ハレブリタニヤマーイエステイトサイスコンシユル
エル ユースデン 西訳

第十二

申

五月朔日於東禅寺満ニ預候隠岐守堀織部正杉平次郎差出ス
英国長崎ニ而之元ニ而差遣候之内
書翰

一 長崎表居留地之儀者丸山之続き西側ニ有之
兎角低き地所ニ而湿気有之、養生ニ相成兼候
ニ付、外国人ニ而住居致シ候ニ付、大浦地を拝
借いたし度、右者低き地ニ無之候ニ付元
文ニ無之元より極ニ高き場所をも望候ハヽ
儀ニも無之候ハヽ
右條之通ニ而近傍之妻所之地を設之事

前以新く申上候とも地所ニ付而取計候
此分も法度刑罰之通可申付候 然共地方ニ而
役所ニ而法度刑罰ニ而上申渡候ても取計
答申し候事

一 長崎湊ニ参候船修復之儀ニ付見分ノ上
中ニ居候ものを船中ニ差置 船見届之儀
候共ニ其場所ニ而以用可申付候

一 盗賊之外難科有之ものニ候ハヽ條例之通
可申付候 罪

一 科之次第及拷問候とも刑罰
罪ニ行ひ候而も不苦候

一 盗賊之外重罪有之ものを吟味之上ニ而死罪
ニ行ひ候儀者存候程ニ不及以添して
可申候

一 私儀ニ付候事ハ一向叶申間敷候
何分ニ而も追々ニ而可有之申上候而
可相成事ニ候

一 長崎之儀何事ニ而も可申上候

一 庫之内渡奉行ゟ請取之上於其中出
来候ニ付而之儀ニ候
右之品々渡遣申渡候ハ其元ニ而鋳地出船請合
所迄為差送可有之候
一 右之之渡遣之写諸向へ為被相渡候
一 右之写并ニ以後之先例迄可申上候
一 渡遣之者共ニ以限ニ相成候得者可然存候
之御出帆之事ニ付右渡遣之庫之渡書様
条ニ付鉄地渡奉行ニ出候間渡僉判ニ

一 諸事承知仕候
卯ひ十六日

三十九番

申五月朔日返ス

銀利五厘之割ヲ以御貸金拝借之覚

百五拾貫目也

ルーセルホルトアールコツクニ

以書付申上候長崎表唐蘭請地代ニ而
若干年毎ニ取立之積リ且又同所町並
之儀ニ準シ右地面所持之先年ヨリ遣取来候
拂據定ナシ家賃地代手数ニ而年毎ニ

地代等出さん事ハ不承知ニ而初年ニ而
追而ニ而地代限ニ返納致其後当年
無之耶蘇地税として出船以前ニ払置
申候右等之儀ハ種々之支有之ニ付因テ
事ハ所々取扱迷惑ニ付何事も程能取計申出候
萬端其許ニ而萬端程能取計其意を難盡
旨ニ付違ひ候事の如く思ふか故ニ相
其許より萬事之程を取る地面之事ニ
細告其段申付候中ニ而有之候事

萬延元年申五月朔日

脇坂中務大輔
安藤対馬守

申四月　日　不知申ホム下ケ

居留場地代之義各国官吏へ
談判之経書付

外国人江御貸渡之分居留場所地代
取立方之儀当申二月中其向ゟ受取所
去年迄ハ貸渡地代御当所取極年々
未納速物ニ而保納猶国ニ而者江
遣渡し節ニ出来候様申合在所所江

相成候得共　横濱表ニ而者　英國之分ハ
右様御取締向等總而相任當地之地
代取極出島之振合を以年々取立候
可仕右同様請書も外國方より差出候
所無之ニ付　不都合ニ付可取計旨
同二月中此書面を以　外國御奉行
其意見御向等申達置候而地代取極年継
江申聞候積各國居留より取立
要　彼方ニ而ハ永年借受ニ地代ニ而

一附紙ニ而者銀高等も無之壹年分ツヽ
取極候而地税等出候様被成度旨箱館ニ而申立候
江申達置候通右御取締向之儀追而申
来候處中々以難ニ付不都合之次第ニ付下知
之趣を押立程々穏候説得ニ候得共此節
一附紙ニ永年ニ而地代等差出置度旨懇情
申張何分外國地ニ而法外之達以自ら者
之次第ニ而此儀取調候得共難替以前ニ而
之有様ニ而前書之通申越之義ニ付

以ハ糺問合候様可被成候ハヽ評判も有之
可申候間左候ハヽ当年ゟ上納候処古来
去ル志願之趣相糺候而御吟味之儀承諾仕候ニ付
出會見合を以地代銀之多寡差略致
諸役之儀ニ付御中ニ而ゟ得共右事要之
廉ニ付全く当決之面々無差支都合ニ有之
何れ三ヶ月之内ニ申出候ハ糺文ニ而強願
候儀申付も難叶旨申候得共以家ニ無之
此儀相伺を以申上之儀相成中ニ立候得

此儀当伺之通早々被成下候ハヽ一両年中ニ而当分之
見込ニ此書面ニ而承知之上諸道具書面上
仕候ハ右写を以御下ケ相成候へハ相伺候ハヽ
有之選挙之上申付候ハヽ諸役皆定候様相伺
可仕与奉存候

一 出會見合を以而地代取極候ニ付而者出
會地所持主申立候處而所之儀先前ゟ
家賃地代共混し賃料前々ゟ仕来
候ニ付寛永以来之右高ニ相通有之候得とも

此坪ニ割付見平均銀二貫三百四拾目ニ当
申候此外七拾二両ニ而金ニ直シ二拾二両
余ニ成候市中ニ見競候而ハ遥ニ高直ニて
地代ニ不相当ニ御座候寛永以来数百年来
取立候事ニ付此度地代見渡地之目的
仕候而ハ難及不都合ニ有之可申哉欲存
出来候ニ付先前之通各国同様ニて
振合ニ付是迄之仕来ニ相成候由坪三
千九百六拾九坪余之内道並空地八百

四坪余引去残二千百六拾五坪ニ分
売候年銀高七拾五貫目余ニ成候而向
後ハ地代銀ニ振当候而も拾五貫石余
人々ニ請取申ニ有之右ニ而も分百坪ニ付銀
二貫三百八拾目ニ当ニ相成候余ニ相当
申間敷相当ニ見合候平均ニ候而ハ出来
候義ニ市中続ハ従来便利之地ニ候間古
田同様ニ而ハ只今ハ夫浦地ニ新開築
立地跡之市中ニ候隔リ先ニ不便ニ而

地位ニ応シ場所柄前書之振合ニ而割
引ニ相成海岸附上等ニ而地代ニ見込
中等下等も右ニ准し該物為仕候得共

一 地代之義者金二拾六両を目当ニ仕壱ケ
年百坪ニ付上等ハ金二拾七両ニ而此洋銀
銀ニ而拾七枚中等者金二拾壱両此洋銀
二拾八枚下等ハ金九両此洋銀十二
枚ニ積該物決定仕候尤金目亦ハ銀
目ニ而高ニ而取極メ候ハ相場ニ而洋銀取
立候方ニ而ハ不能候物為取引ニ而被致
格ニ而洋銀枚数ニ而不極候而ハ不相済
民共ニハ地代ハ貢数ニ而差出候節ハ差支候ニ付
中五等級義者金高洋銀壱枚七匁以上
ニ而取極候積承届申候

一 前條之外該物中之儀ニ付未決
次第委細可申上候得共地代取立方
之儀者下知ニ随ひ申候ハハ承諾
不仕全く三十九ヶ年中減少之儀ハ不致

趣ヲ以御決議有之度此段申進候

中略

勧業寮三郎　小倉九八郎　高橋平作

申候迄ニ申出候以上

申四月

岡部殿御中

附致

申四月　日　下知上ル（印）

岡部殿御中

長崎表居留地地代取立方之義ニ付

評議付申出候書付

長崎表居留地地代取立方之義ニ付同所

ゟ伺出候書面並写書差越致

御下一覧仕候処右地代ハ第之付高ハ

当二月十八日英國ミニストルゟ御箱館奉行
同人ゟ申越候ハ永年借受候地代として一時
ニ差出候洋銀高之内差出年々右者舶
ニ地税差出候様致候儀も年々立替
御許容有之間敷哉之段御談判有之儀
有之且右先般町並ニ地代ニ准シ取極
置候者御議定有之候ハ、年々町並
ニ振合を以為年継御代貝渡可相成
之振合御治定有之候ハ、其外本当ニ相極候得

駿河守申立之通ニ而今般英國ミニストル申立書
相添差出候右者先般可有之間地代金之儀
金目銀目ニ而高之取極候由彼方ゟ申立
有之候ニ付同所洋銀枚数を以議定致候
相当之代銀之洋銀ニ而差出候旨
協議之上御治定相成候多國ミニストル申立
申立候書類并ニ地税之積相定候洋銀
枚数ニ而地代可極候不都合ニ付次第
之付右書類写添此段申上候右

之様去心得違候者無之様可被申越

哉ニ存候依之此下ニ書類差上

候此段可然樣御勘弁之上御深慮被成下度

以上

申五(四)月

外國奉行

[illegible]

[illegible]

第四

申五月四日於對馬守殿御宅中務大輔殿對話之節英國
公使アールコツク江對話之内

一 長崎之儀ハ先年より同所地面之義ニ付
コンシユル議同之上議候ニ付右論旨之由右證書
を写ニ而も御承知被成候ニ付右ニ而相成
其儀ハ申聞候而下知ニ付右ニ相仕置
船便ニ而も御返ニ而可申旨御申上候

一 地税之儀未タ治定無之右長崎表規定書ニ
記有之候右ハ先日談判之後書翰ヲ以申遣置

出海年々ニ以取拵候処右積之内ニ而相遣居
候も難計念のため取調候

一 右者先日御読判ニ出海ニ而相越之節立寄富士下より中
宮年々地税出納ニ年々同人ニも納取致
候

一 右積ニ而ハ宜哉ニ候

此儀絵図面差出

一 先ヶ先日御読判中上ニ候絵図面ニ而申上候山頂
右ニ寄り居候由出雲守年々候但去頃[illegible]

一 下混ニ猶又居候ニ付建築置山の中程ニ
候得共外船渡所并ニ墓所之儀ニ
有之右之者ヘ先行居候支配之双方掛合宜
敷場所見定候渡ニ相成候節ハ御沙汰可
致候

一 中程之儀ニ付女神心得ニ而差出候一国之中ニ候実
地ニ臨ミ候而も可有之其上之年行届候様
判之上者是又場所又可被渡旨申上候

一 船渡場之為ニ何之事候哉

一 右之儀も双方ニ而談合有之 此所ニ而済候ハヽ可申筈
ニ候ハ、其余之儀ニ付船より申立候事有之詳
議ニ上官届可及候ニ付上ニ而何連も申立候ハヽ吟
判の儀ハ
一 右館送荒者来之様ニ船候渡場も双
方ニ而談合有之場所相極ニ付修候
一 荒者ニ而右荒者も舘江皆此方より申上
彼方之評判候ニ付事相極以後相極候
一 素より読細之儀ニ付一ニ而ニ候ニ付ニ而

談判ニ者有之私より相心得候若荒者之嫌
而ニて申出候
一 右荒者も彼是ニ而付之ニ未相成此方申候ニ付
御申出候前ニ者談合相成候上評議候而有之
此之節り致候
一 素より行違ひ無之様ニ談合ニ付私方立
面ニ而外而り候の人ニ候は御案内可申上候間
右ニ而右荒者振翻訳可申入候ニ説右同
行違無之様取計有之候度と取候も

一 近く有之候積ニ存候

一 至極宜敷候

一 強く寄合ニ而相用候も右条約之写可差上候
読候

一 合候

三十二番

申五月九日差出

第六十五号

ハーレブリタニヤマーイエスニイートのワイスコンシユル、エル、ユーステデン、

別紙申越候

千八百六十年第六月二十四日江戸

ニ而別段條約取結候ニ付

余雖長崎の外国人居留所ニ来り

就ては「ハーレ、マーイエステイト」ミニストル長崎

のブリタニヤ、コンシユルに給る書翰に返答を
足下より送る所の口上書并に此度長崎在
に給りし給はる處の書翰之儀候を謝る
丈々速に我方より送り給へるべし一日彼
港へ着便所ありて二日前に余之書を足下
に知らしむべし敬白

ハレブリタニヤマーイエステイトのワイスコンシユル
エル ユーステン

第六書添出ス

ハレブリタニヤマーイエステイト」ミニストルより長崎
在留のブリタニヤコンシユル江同所外國人居留地
の事に就き送れる書翰の譯文

四十六号

千八百六十年第六月二十六日江戸ハーレ
エル エーデルゲストレンゲヘールに
マーイエステイトのレガチーにて
足下の送れる先月二十七日附の第五十七号

公書并ニ長崎外國人居留地の事ニ付
足下及ひ全權の人ニ面談致度旨の會議
の事を差出し其後右件を述ふ
○外國事務宰相名下今日余と其會合ニ
於る既ニ其以前より宰相の擇定を受る
為め送りたる會議を定むる為め用意
あることを告知ありし由也足下ニ述ふる
ところ実ニ満足せり然
当時無決定ならす又多く商量を要

せる故ニ足下余ニ注意せられ免し請ふ条ハ
引続き商議せしことも其の如し
第一名下日本宰相ニ親書護方の於閣老ニ
至ニ取扱ハんことを称せる余か説明ニ由て
許諾し且従前ニ当地ニ開きたる事件を
江戸よりの命を待ち其後江戸ニ言送る
当の事無く外國人ニ告たる上談判し當地
限りニ而定むへき事ニ付為め在府ニ下せる
命と同格の語にて足下ニ命せ下せることなとと

皆的當なりと云へり

第二　小山の傾斜(ナダレ)一絶頂の下坂に生し半腹
より一方に於る住家の為めに要する地面を
十分の次第ありて道理正しき妨げある
則ち地面の如きは之に住居すべき約束
にて賃借せる事更に妨げあるにいたる
欲する時は是を妨けと言ふべし　○
是等は船舶海湊場及び埋葬所に
続するの目的なるべし

第三　公共の為めに更に適當せる居住
所を與ふる日本政府或は豪富の日本人
皆的を以て適當なる場所に家屋を
建造せしむと得るや否やのことは尚商量
中なり
是ハパーレマンタイエステイト英吉利政府に於るは先
費の比例(ワリアヒ)を以る正當の法(借)賃及び有る
屋の修覆の料なると拂ふ役等あるべし
なり

第四　足下の熟評せる刑法を新たにせる
ことに就ては近便なる事なれは令を下
せし由なり
此事件をも変ずして甚だ緊要なる事
なれば此外数多の瑣細の事の終りに
寧ろ右台下の尊慮を要せざる事ならんと
思ふと雖も之れを論ずる事を得ざるし是
一ツ他の法則を強く拘持すれば此
事の一新せる事を希望すれは

なり〇是以る余他の事を為すの事
足下の長崎に帰りて此告知を請ふ
ならば足下よりの報告を得んことを待つ
〇此書状を送る以前余が足下に告知
すべき事件に就き著しき変常し
命令の効験を足下細密に告ぐべし
謹言
ハーレブリタニア　マーイエスティトの特派全権公使
ルーゼルホールド　アールコック手記

三拾二番

申五月廿日乃名出

第六十六号

ハーレブリタニヤマーイエステイトのワイスコンシユルエルユーステン

外國奉行衆江

千八百六十二年第六月二十八日江戸ブリタニヤ使臣館

ニ於て

余謹て足下に左件を告く本月二十日(貴國の五月
十二日)ニ長崎ハ書翰を遣るべき幸便ある故ニエキせん
レンテー ミニストル長崎在外國人居留地の事ニ就き云

江戸ハーレブリタニヤマーイエステイトのワイスコンシユル
エル ユーステン

貴所へ贈らるべき書翰の翻譯を以て下より送給ん
ことを請望為め啓白

江戸在留ハレブリタニヤマーイエステイトのワイスコンシユル

エル　ユーステン

申五月十二日来ル

大貌利太泥亞ワースコンシユル

エスクワイル

エル　エーステント

当年五月十五日附第千号の書翰ハ
瓜哇ミニストルより長崎奉行へコンシユルト書
送りたる和蘭書翰の写しを以て差添せり

印鑑ヲ相改、右之中ニ而ハ小印ヲ以テ之
趣有之、就而者約束之通リ彼地奉行ニ
而右達書并和蘭文訳を以テ掛合
よりも許述申来候間、其国ミニストル
ヘ通達有之候様存候旨

安政元年寅十二月十三日

溝口讃岐守
酒井隠岐守
竹本図書頭
鳥居越前守

当地之十二月中ニ相越趣も有之候
長崎奉行より之達書とも於和蘭役々
ヘ相渡置候間、右類相送候間
為御心得申達候事

朱書ハ附紙

長崎奉行口

一 右地外国人居留場地代之儀年々取極
有之候処此節右議定之上ニテ当英国ミニストル申立
ニ付何れも当地代之儀洋銀円相場を以
受取候様取極可被談候

一 右地所之儀大浦山之中腹迄も貸渡相成候ニ付
猶又右外山の中腹迄追々貸渡候様取極
之双方役人立会之上相極山之中腹迄貸渡

其儀ヲ相咎メ右旨申立其国ニ取計可
得其意居候文言之場所ハ山の井腹近キ
貸渡候様ニ取計可申候

一 其地ニ於テ船修復場并埋葬所取建
度旨申立候ハヽ双方示談之上其文言之場所ハ
取建候とも不苦旨其筋江相達置候得其意差
図コンシユル申談可取計候

一 其地ニ於テ外国人之取扱未済之ものハ都而
其仕来無之候迄ハ是迄之趣申立可心得候

私ニ取計候外国人引合候ハ其仕来之節ハ別而
手際ニ而取計候様相心得且又其外仕来
満之儀通達之儀ハ申立候節都而外国
人ゟ引合候一件ハ其仕来之通ニ而都而之
コンシユルゟ申達候様可取計候
右之趣可心得候旨相達候
書面之趣意ニ候得共尚取計之上別段之趣
アールコツクより之使其他コンシユルゟ申達之趣
中立之旨其文可得其意候事

第一

申六月廿一日對馬守殿御宅於て荊棘臘年官に御對話（中務大輔殿並ニ大和守殿）

第十七号

御問

一 三ヶ年以来長崎出府致候ニ付御承知
御許容相成候斗ニ而未タ手続ニ相成候自
由交易之義許容相成之旨人数之商人在留
相成候上者何分限有之ニ通ニ而不様ニ而
申立候中ニ何連書面ニ而申上候間御書留
ニ而随而御答可申候

一 諸判も沸振向之の依御座候も無之候ニ付子細も

十五番

申六月廿八日差出

第十七号

千八百六十年第六月十六日江戸に於て

大君殿下の両執政外国事務宰相名下に呈せし

長崎にて和蘭人居宅土蔵を建るため不足

なる地面を補ふべき仕法に就て右得事候

書簡を以て余に頼成したりといへども此議

さして事なし

是故小子此件を善く明白に述置ん為主意

一

猶しかる後ん

十五番

台下ニ懇求し依て下條を定めんことを欲
述ぶ 即チ長崎ニて江戸町西図家の下ニ在る
此の如ニ於て和蘭人家屋を建つべき地面を
借り渡しもて和蘭ニ従者たる日本人の居宅土
蔵を借り渡し 或ハ是を要求する自由を
得んことを又此如き取直チニ長崎奉行ニ告ケ
和蘭ハ是迄も絶へずして懇りしたる故障の
おき様ニ計らひ給ふ事を願ひし 恐惶敬白

日本在留和蘭領事官

イハドンクルキユルチウス手記

申

六月七日ニ遣ス

和蘭領事官
ヱキセルレンシー
イハドンクルキュルシュスト江

貴国去六月十六日附十七号の書翰落手せり長崎表和蘭人居留之場所出嶋のミにては不足なる趣ニ付海面埋立之事を欲し又ハ大浦地方諸外国人居留場之内ニ而地所撰ぶ欲し何連も

同列奉行ゟ差図ヲ受候も有之ニ付評
議之上右極之内ニて勤弁有之度江戸町ゟ西役所
下知之有之節も速ニ求ニ應し可申候此段返書
差越候様ニ洋具謹言

万延元年申六月七日

脇坂中務大輔

安藤對馬守

[stamp]

国立公文書館
National Archives of Japan